

「主を賛美しよう」

詩篇 150 篇 1－6 節

森島 牧人 牧師

今日は私たちの教会のバンド、エルピス（希望）の伴奏で神様を賛美する讚美礼拝の日です。楽しく賛美をささげながら、アメリカでの賛美の変遷について学びたいと思います。今日の聖書は詩篇の最後 150 編です。

さて、17世紀にピューリタンの国として誕生したアメリカでは、キリスト教が衰退しかけると宗教復興運動（リバイバル）が繰り返され起こりました。1750年頃アメリカ北東部で起こった第一次宗教覚醒運動はアメリカ南部にも到達し、教会の空気を刷新する新しい賛美を多く生み出しました。中でもイギリスの牧師の作った「讚美歌と宗教歌」はヴァージニアの牧師によってアメリカにもたらされ、大いに普及しました。また、兄とともにイギリスでメソジスト派を創設したジョン・ウェスレーもアメリカにやって来て宣教活動をし、1737年「聖歌および讚美歌集」を出版します。丁度この頃シェイプ・ノートと呼ばれる簡単な楽譜表記法がニューイングランドから南部に入り、譜面の読めない人々も賛美の素晴らしさ楽しさを知ることとなりました。このようにこの時期、多数の讚美歌集が南部にもたらされ、賛美の喜びがこの地域を満たして、後にバイブル・ベルトと呼ばれるキリスト教的保守基盤の下地を作り出すことになったのでした。

1795～1850年には第二次宗教覚醒運動が起こり、南部ではさらに多くの讚美歌が生み出されます。特にアナニアス・ダヴィスンによる「セイクリッド・ハーブ」はこの運動に大きな影響を与え、その正確で美しいハーモニーは当時の白人教会の信徒の心を捉えて白人の聖歌（ホワイト・ゴスペル）の伝統がここに形成されることになりました。

その一方で南部にはアフリカから奴隷として連れて来られ、すべての尊厳をはく奪された多くの黒人がいました。苛酷な運命の中にあっても彼らは歌と踊りに自分たちの生命を表現する＜アフリカの伝統＞を失うことはありませんでした。まず単調な仕事を支えるワーク・ソングを生み出し、哀れな日常生活を哀愁に満ちたスレイブ・ソングにしてロズさみ、自らの運命と魂を慰めたのです。さらに彼らは密かに集まり、輪になって踊りながら手を叩き絶叫して怒りや悲しみを表現するリング・シャウトと呼ばれる時間を持つようになりました。やがて黒人奴隷の伝統的アフリカ音楽に白人の讚美歌集のキリスト教的メッセージが混ざり、そこにドラム・バンジョー・ギターなどの楽器が加わって、独特の賛美スタイルを生み出すこととなりました。これが一般的にスピリチュアル（黒人霊歌）と呼ばれているものです。

1865年南北戦争が終わると奴隷解放が実現し、黒人のための教育機関フィクス・スクール（現在のフィクス大学）が作られますが、慈善団体の寄付に頼る学校経営は困難を極めるものでした。そこで学校がその存続のために考えたのが学生合唱団フィクス・ジュビリー・シンガーズによる全米ツアーでした。北部の人々に初めてスピリチュアルを紹介するこのツアーは大好評を博し、南部各地に黒人の合唱団が続々と誕生、高度な音楽として形を整えて北部に出て行ったのです。

これは世紀の変わり目に沸き起こった第三次宗教覚醒運動の盛り上がりと相俟って凄まじい勢いで全米各地に広がって行き、南部はこの運動の最前線となりました。特に急速に南部一帯に勢力を伸ばしたのはペンテコステ派で、その流れの最大の教派がプレスリー一家も属していた「アセンブリー・オブ・ゴッド教会」でした。

しかし南北戦争後解放された黒人でしたが、しばらくして南部から連邦軍が去り、実権が旧支配層に戻ると、南部諸州は「ジム・クロウ法」と呼ばれる人種差別政策を徹底し、再び黒人の自由を奪って行きました。南部に絶望した黒人たちは当然のごとく北部へと流れ込み、シカゴ、デトロイト、ニューヨークといった大都市には黒人文化が栄え、ジャズやブルースやゴスペルといった新しいスタイルの音楽が、このリバイバルと一つになり全米を席卷して行ったのです。こうして、決まった形の礼拝だけではなく、多くの人々の、いろいろなタラントンが用いられて神を賛美するという時代が開かれて行ったのでした。

本日の聖句には「聖所で神を賛美せよ。大空の砦で神を賛美せよ。力強い御業のゆえに神に感謝せよ。角笛を吹いて神を賛美せよ。琴と豎琴を奏でて神を賛美せよ。太鼓に合わせて踊りながら神を賛美せよ。弦ををかき鳴らし笛を吹いて神を賛美せよ。シンバルを鳴らし神を賛美せよ。シンバルを響かせて神を賛美せよ。息あるものはこぞって主を賛美せよ。」（詩篇 150：1－6）とあります。私たちの礼拝も賛美に溢れる礼拝にして参りたいと思います。

（説教要約 羽入田悦子）